

氏 名	安 祥希
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7993 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	現代日本語における助詞「に」の研究 —並立助詞・接続助詞・複合辞の「に」を中心に—

主 査	筑波大学 教 授	博士（言語学）	杉本 武
副 査	筑波大学 教 授	Ph.D.（言語学）	竹沢 幸一
副 査	筑波大学 教 授	博士（言語学）	沼田 善子
副 査	筑波大学 教 授	博士（言語学）	矢澤 真人
副 査	筑波大学 准教授	博士（学術）	澤田 浩子

論 文 の 要 旨

本論文は、従来、現代日本語の助詞「に」の用法の中でも、あまり取り上げられることのなかった、並立助詞の「に」、接続助詞の「に」、複合辞を形成する「に」について詳細に分析し、格助詞「に」との関係などを明らかにしようとしたものである。

様々な文法範疇にまたがって用いられる「に」については、従来、格助詞の「に」の意味役割を分類することに主眼を置いた記述が中心となっており、本論文で扱われるような「に」については、ほとんど研究がないか、格助詞の「に」と連続したものとして記述を行ったものがほとんどであった。このため、様々な「に」について体系的に論じた研究は未だ見られなかった。

本論文では、このような問題を背景に、現代日本語における「に」には、もはや、格助詞との関連性を有さないものが存在する可能性があるという視点を導入して、格助詞「ニ」（なお、本論文では、格助詞の「に」は「ニ」と表記されるため、以下、それに倣う）そのものではなく、その周辺に位置付けられるような「に」から取り組んでいくという方法を試み、以下の点が明らかにされる。

- 1) 現代日本語における「に」がいかに用法の広がりを持つのか。
- 2) 格助詞「ニ」と繋がりを持つとされてきた「に」が、どの程度関係を有するのか、もしくは、有さないのか。
- 3) 格助詞「ニ」とその周辺に存在する「に」、また、周辺に存在する「に」同士の間に見られる関係性はいかなるものか。

本論文は、以下の 8 章から構成される。

第1章 序論

第2章 先行研究

第3章 並立助詞の「に」

第4章 接続助詞の「に」

第5章 複合辞を形成する「に」

第6章 「兼ねる」類文と共起する「に」

第7章 現代日本語における「に」の様相

第8章 結論

第1章では、本論文の背景と目的について述べた上で、本論文の立場が示される。

第2章では、助詞「に」に関する研究を概観し、主要な問題として、「に」の出現する環境と関係なく、「に」の出自を格助詞「ニ」とするものや、格助詞「ニ」の意味で「に」全体を説明できるとする見方が多いことが指摘される。

第3章では、並立助詞の「に」について論じられる。従来、代表的な並立助詞の「に」として扱われてきた「月にむら雲」類における「に」は格助詞「ニ」と捉えられることが示される。また、並立助詞と捉える基準として「名詞を列挙し、全体を1つの名詞として機能させること」「名詞が入れ替えられること」の2つを設け、用法を2つに分類し、「添加」の機能を果たす「典型的並立助詞「に」」は、他の並立助詞と同じ特徴を有する典型的な並立助詞の用法であり、従来指摘されることのなかった、最後尾の名詞に「に」が付いた「例示を表す並立助詞「に」」は、全体で一つの名詞としては機能しないという点で、「典型的並立助詞「に」」と異なる特徴を持つことが論じられる。

第4章では、現代日本語においては衰退しているとされている接続助詞の「に」について論じられる。同じく動詞終止形に「に」の付く「勘案するに」類、「思うに」類、「要するに」を取り上げ、4つのテストから、「勘案するに」類の「に」は接続助詞の「に」、「思うに」類の「に」は副詞節マーカーの「に」、そして「要するに」は副詞語尾の「に」であることが明らかにされる。さらに、各形式には、節性の大きさに関する共時的連続性が認められることが主張される。

第5章では、「に」の記述という観点からすると、複合辞を形成する「に」の従来の捉え方には問題点が多いことを指摘するために、「はずみに」と「うえに」が取り上げられる。「はずみに」は、「はずみで」とともに複合辞とされることが多いが、「はずみに」は時の「に」と関係する複合辞であるのに対し、「はずみで」は「名詞（はずみ）＋デ」の内部構造を有するものであり、また、「うえに」は、従来、複合辞としての用法が2つあるとされてきたが、一方は複合辞としての用法、もう一方は「名詞（うえ）＋ニ」であることが主張される。本章の議論から、複合辞を形成する「に」に関しても、複合辞ごとに「に」の性質を論じる必要があることが明らかにされる。

第6章では、「兼ねる」類文と共起する「に」について論じられる。「兼ねる」類文と共起する「に」は、並立助詞としても、格助詞「ニ」としても捉えられないことを指摘し、従来指摘されているどの「に」とも異なるものであることが主張される。統語範疇が明らかでない、このような「に」の存在は、時の「に」なども含め、未解明な「に」がまだ残されていることを示唆することが述べられる。

第7章では、これまでの議論に基づき、現代日本語における「に」がどのような様相を呈するののかについて論じられ、現代日本語の「に」の用法はかなりの広がりを見せており、格助詞「ニ」とは関係性を持たないものも存在していることが明らかにされる。

第8章では、本論文の議論をまとめ、今後の課題および展望について述べられる。

審 査 の 要 旨

1 批評

助詞「に」については、従来から、格助詞を中心に様々な立場から様々な議論が行われているものの、用法を細分化するもの、抽象的な機能から各用法を説明するものがほとんどであり、また、格助詞以外の「に」については、必ずしも十分な分析はなされてこなかった。本論文は、それに対して、助詞「に」の周辺的な用法を中心に据え、それを助詞「に」の体系の中に位置づけるという、新たな助詞「に」研究の方向性を提示した意欲的な研究と言える。まず、それぞれの形式の分析においては、従来の定見にとらわれず、コーパスから得た大量の用例を丹念に検討し、その語法を明らかにした、極めて実証的な研究となっている点が評価できる。その新たな知見として、並立助詞の「に」について、従来指摘すらされていなかった「例示」の用法を見出し、並立助詞の「に」の中に位置づけた点、また、従来、単に衰退した用法として等閑視されてきた接続助詞の「に」について、接続助詞的な「に」の用法が一樣ではないこと、その中でも接続助詞の「に」と考えられるものが現代語においても存在することを明らかにした点が挙げられる。

また、それぞれの「に」の語性を決定する際には、いくつかのテストを設定し、十分な論拠を提示した点も、本論文の優れた点と考えられる。例えば、複合辞を形成する「に」については、従来、複合辞であることを前提に複合辞全体の機能が主に論じられ、「に」自体にはあまり関心が払われてこなかったが、本論文では、いくつかのテストをもとに、それぞれの「に」の語性が明らかにされている。以上の点で、本論文は、語法研究として高い価値を有するものであるが、それにとどまらず、その分析を総合し、助詞「に」の用法の広がりや相互の関係性ととも提示され、様々な用法を持つ助詞「に」の様相が明らかにされている点で、助詞「に」の体系の研究としても有益なものとなっている。

しかしながら、いくつかの問題も見出される。まず、周辺的なものとして助詞「に」の様々な用法が取り上げられるが、果たして、本論文で取り上げられたもの以外に助詞「に」がどの程度の広がりを持ち得るものであるのか、明確には示されていない。このため、様々な助詞「に」の関係性は示されるものの、体系性の面では未だ十分なものとは言えない。また、それぞれの「に」の品詞性についても、十分に明らかになっているとは言えない部分、あるいは、品詞性の問題と文法化の問題が切り分けられていない部分がある。これらは、助詞「に」の体系をどのように考えるのか、どのような品詞論を前提とするのかが十分には明確ではないことに起因するものであると考えられる。

ただし、このような問題は、本論文で取り上げられたような周辺的な現象、つまりは体系からはずれた現象を扱う上で必然的に生じる問題であるとも言え、逆に、本論文で明らかにされたことを基盤として、今後、助詞「に」の体系を再構築する可能性が開けたと考えられる。この点で、上記のような問題も、むしろ本論文の発展性を示すものであり、本論文の価値を何ら損なうものではない。

2 最終試験

平成 29 年 1 月 17 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。